

申請者:張 雪心 Barbara

論文題目 ヒューマンウェア技術の国際移転における「触媒的仲介者」の役割

審査員 守島基博  
片岡 寛  
伊藤秀史

本論文は、製造業における生産技術の国際移転(俗にいう、ヒューマンウェアの移転)が、日本人のみで直接行われる場合よりも、日本の生産技術を理解した現地人に近い人材を媒介とするとともに、より効果的に行われる現象に注目し、その効果が生じるメカニズムを明らかにしようとした研究である。フィールドとして選択されたのは、近年日本の製造業進出が著しい中国であり、なかでも電子機器メーカーの中国への生産技術移転を中心に広範なヒアリングを行い、その結果を論理的に再構成することで、筆者が「触媒的仲介者」とよぶ、中国人伝達者の存在が、技術移転において、大きな効果を生む過程に関する仮説を導出している。

筆者によれば、一見、余計なステップの導入にも見える、現地人「触媒的仲介者」の活用は、生産技術移転を受け手の学習プロセスだと捉え、現地人材が介在することで、受け手の学習プロセスが促進されるプロセスを明らかにすることで説明できると言う。具体的には、2つの学習促進プロセスが検討される。ひとつは、暗黙的な部分の多い生産技術の移転において、受け入れ側の理解や思考を助け、学習プロセスにおける情報の流れをスムーズにする促進プロセスである。そして、この場合、触媒的仲介者が日本人ではないことが、受け手にわかりやすい情報の提示を可能にする。筆者は、これを情動的促進メカニズムと呼ぶ。第二は、触媒的仲介者が、受け手との近接性や類似性などにより、学習者の内発的な学習意欲を喚起し、能動的な学習を促進する流れである。筆者は、これを心理的促進メカニズムと呼び、情動的と心理的という2つのルートが存在することが、学習プロセスを効果的に促進すると考える。論文においては、この2つのプロセスが、さらにいくつものサブプロセスに分解され、触媒的仲介者による学習促進が複層的なメカニズムとして整理されている。

また、論文の後半では、触媒的仲介機能が、国境と文化などの「境界を跨ぐ知識ノウハウの移転と共有」を促進する、普遍的で一般的なメカニズムであることが示唆され、この論理を制度的な仕掛けとして技術移転プロセスのなかに組み込んでいる事例として、日本の自動車産業の米国への技術移転プロセスが紹介される。

本研究の強みは、なんと言っても、生産技術移転を、受け手の学習プロセスと捉えなおすことで、触媒的仲介プロセスがなぜ効果をもたらすのかについての仮説体系を呈示した点にある。丁寧なヒアリングとそれに基づく仮説の導出は、詳細で包括的であり、審査員一同その点に関する評価は高い。難点としては、分析サンプルの選択基準のより詳細な記述、妥当性や限界の指摘などがあれば結果に対する信頼性が増したと思われる点、さらには、普遍性への展開と併せて、サンプルをより詳細に分析することで、本論文で検討されている仮説のいくつかがより深く検証できたかもしれないことなどが審査において指摘された。だが、いずれも本論文の貢献を大きく減じるものではない。

よって、審査員一同は、所定の試験結果を合わせて考慮して、本論文の筆者が一橋大学学位規則第5条第1項の規定に準じた取扱により、一橋大学博士(商学)の学位をうけるに値するものと判断する。